



なきごえ

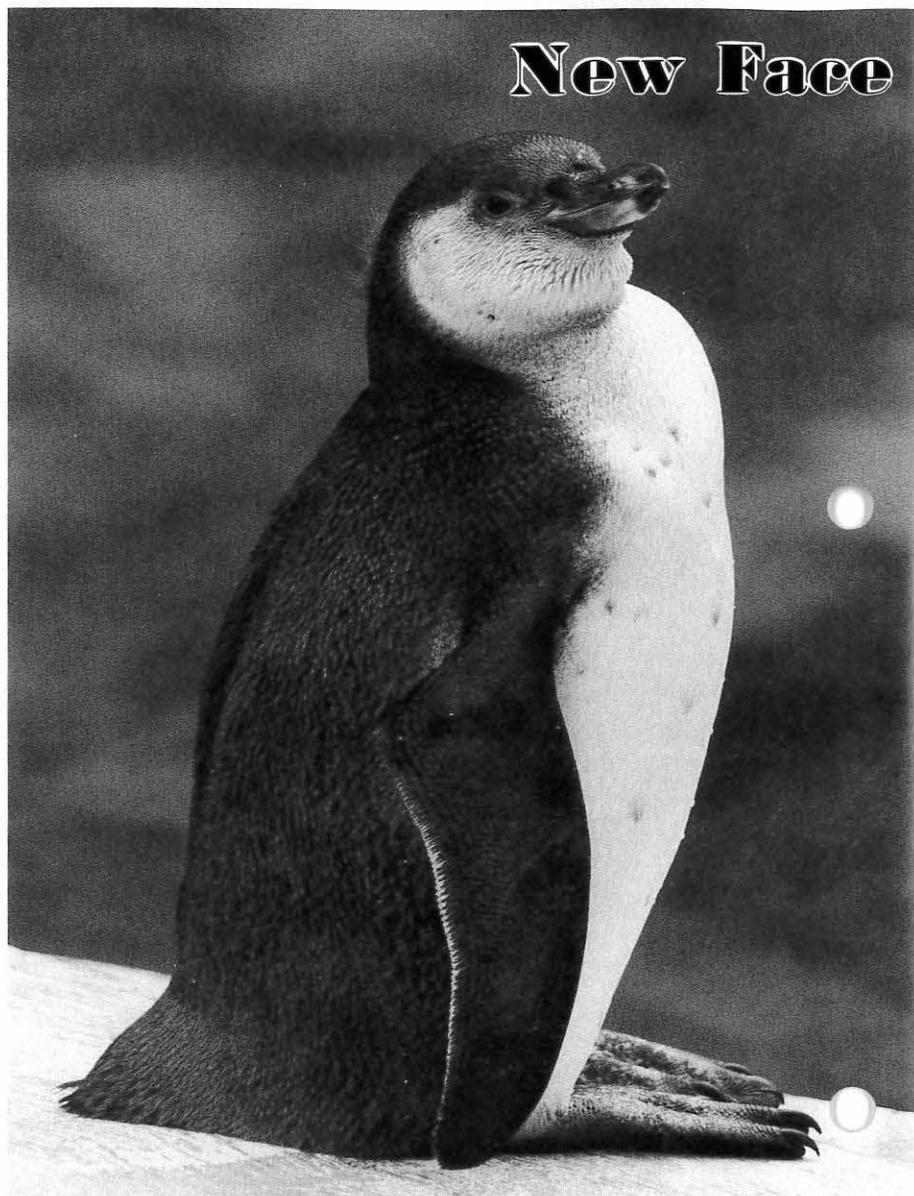


1996

4



大阪市
天王寺動物園協会



(撮影：堀内 智生)

- 2 — New Face フンボルトペンギンのヒナふ化 (堀内 智生)
- 3 — 動物と私 ほちほち いこか! (早川 啓一郎)
カバーウォッチングアントンギルガエル (宮下 実)
- 4 — 日米動物園気質 (川田 健)
- 6 — 南アフリカとジンバブウェを訪ねて (長瀬 健二郎)
- 8 — グラフZOO は虫類生態館この1年 (榎原安昭、西村慶太、中上正幸)
- 10 — キーパーズアイ (早川 篤)
- 11 — ZOO DIARY

カバーウォッチング

アントンギルガエル
カエル目 ヒメアマガエル科
Dyscophus -antongilii
マダガスカル北西部に分布する全長11cmほどのこのカエルは、トマトガエルの呼称が似合うような明るい赤褐色をしています。
(撮影：宮下 実)

||||| 動物と私 |||||

ほちほち いこか!

私は、今から6年前、40歳をむかえる直前に16年間の勤め人生活をやめ、新しい暮らしを始めました。友人の作家が創る版画や陶器、木工品、絵本等を置く小さな店を夫婦二人で開いたのです。

最初は来店されるお客様も少なく、暇でボーッとしながら「人間らしく生きるとはどういうことやるか?」とか「自分て一体何者やろう?」とか、それ迄あまり考えなかったことを、アレヤコレヤと思いつくようになりました。そして近くの図書館で「日本の歴史」や「人類学」「宇宙論」「哲学」などの本を手あたり次第借りてきて読んでみました。しかし、それぞれの知識は何となく増えたような気がしましたが、先程の疑問はなかなか解けませんでした。

そうこうしているある日、私の尊敬する詩人の工藤直子さんの詩絵本(絵は北海道旭川の動物園の飼育係あべ弘士さん)『ゴリラはごりら』の中の一節に出会いました。

みみずは どうして「みみず」になり
ゴリラは どうして「ごりら」になったんだろう?

← フンボルトペンギンのヒナふ化 ペンギン目 ペンギン科

昨年の12月4日から今年の1月12日にかけてフンボルトペンギンのヒナが次々とふ化し6羽が育っています。写真は最初の1羽で2月16日に巣立ち、初泳ぎしました。



早川 啓一郎 さん

(陶器と版画のお店の主人)

むかしむかしの おおむかし
あーい!と だれかに よばれたきかして
そつちにむかって まいにち
せつせ せつせと いきていたら
ちょうは ひらひら「ちょう」になり
花は だんだん「はな」になり
もぐらは もこもこ「もぐら」になった…の
かな? 「ゴリラはごりら」<どうなおこ詩
あべ弘士絵 童話屋刊)

この詩を読んで、ハッと気づいたのです。今迄、「人間らしく」とか「人間とは!?!」とか「人間」とらわれすぎて、もつと根本的なところを見ずごしていたのです。人間、いや「ヒト」はこの大宇宙に数千億存在する銀河のひとつ(私達の銀河系)の中に又数千億ある恒星のひとつ(私達の太陽)の惑星のひとつである地球の上で、「みみず」や「ごりら」「ちょう」「もぐら」といつしよにズーツと昔から「せつせせつせ」と生きてきて今があります。私達の「いのち」は(地球が出来て約10億年程後)約35億年前に誕生して以来次から次へと何億世代も受けつがれて(困みに私は45歳ですから正しくは35億45歳ということになります)生物同士が複雑にかかわり合いながら生きる関係をつくってきました。カビや大腸菌、水中のプランクトン、地中のバクテリア等も私達と深く関わって生きており、ヒトにとって有用とか無用とかという勝手な価値観が入り込めない深遠な世界が広がっています。私達「人間」だけが特別な存在ではなく、まして地球の主ではないのです。より速く!より大きく!より大量に!を追いかけてきた私達は、ちょっと立ち止まり自らをみつめ直すことが必要ではないでしょうか。「ほちほち」行くのも、いいもんですよ。

(はやかわ けいいちろう)

雪の中のカンガルー

去年の11月に南紀白浜に出張した折、私は天王寺動物園を26年ぶりに見学させていただきました。その時、園内に暖地の植物であるユーカリや椰子の類が繁っているのにすこし驚き、日本の気候が温和であることに改めて気づかされました。渡米以来4半世紀、いざさかアメリカばけしている私のことで、それも当然だったのかも知れません。というのも、フロリダを含めたメキシコ湾沿岸やカリフォルニアを除いては、アメリカの冬はモーレッツに寒いのです。

真冬に旭川や釧路を訪ね、あのすさまじさに接したお方なら見当がつかずでしょうが、動物園でも屋外の動物に与える水など容器ごと氷のかたまりと化します。飼育係は中身をすっぽりと柵の外に捨てます。氷点をはるかに下回る日が延々と続く、氷の彫刻みたいな柱状の小さな塔が、溶けることもなくいくつも根をはやすようになります。動物園によっては、動物舎というより小屋程度の建物しか備えていない例もあります。暖房にしても申し訳もないにちっぴけな電熱ヒーターが天井にくっついていてだけで、ドアは開けばなし、しかも北向きだったりします。建物の中とはいえ飲み水は固い氷となっています。



雪の中のカンガルー。低温に耐えるしぶとさを持っている

そんな環境に、アカカンガルー、グラントシマウマ、シロオリックス、タテガミオオカミなど温暖な国からの動物が飼われています。よくも寒い様子を見せないものだと、こっちが感心(寒心ではありません!)してしまいます。かつて私が飼育係をしていたカンサス州のトベカ動物園には、電熱ヒーターもない動物舎が多かったのを思い出します。ライオ

ン、ジャガー、鳥ではレアなどがマイナス28度C



レアは南米の鳥だが、マイナス30度Cぐらいまでは平気のようである

何物でもないでしょう。

もっと緑を

いつぞや東京の動物写真家の某氏が全米各地の動物園で取材をされました。その時彼はカンガルーを念入りに撮っていたので、

「なぜちっとも珍しくない動物を撮るんですか」と尋ねました、すると彼は

「日本の動物園では動物を土やコンクリートの上で飼うでしょう。あれでは「商売」になる写真ができませんね。アメリカでは芝生の上にいるから、キレイに仕上がるんです」との返事で、私は改めて日米の相違を思い知らされました。

日本人とアメリカ人の違いのひとつは、アメリカ人は芝生で地面を埋めたがる人間だということでしょう。前庭、中庭、裏庭、ウナギの寝床みたいな外柵と道路の間からハイウェイの中間帯まで、私有地、公有地を問わず、彼等は芝生をびっしりと敷き詰めないことには落ち着けないのです。彼等にとって、芝生は生活環境の一部として定着しています。

そんな人々が動物園を造ると、当然のように動物を芝生の上で飼う結果になります。でも芝生にもマイナス面はあります。岩山に住む動物を草の上で飼うのは不自然だ、という声もあるでしょう。種撒きから散水、芝刈りまで時間と費用がかかりますし、掃除もコンクリートの床のように能率的ではありません。また動物によっては、糞の中の寄生虫卵が芝生の上に残る、それを動物が嘗めるといった具合に、芝生が寄生虫再感染に役買うこともあり得ます。

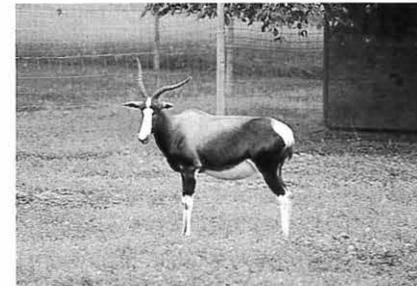
その反面、プラスの面がはるかに多いという指摘もできます。芝生には「見てくれ」がよいというだけでなく、他の利点もあります。例えば猛禽がとまり木から床に着陸する際、固い表面よりも草に覆われた表面のほうが足裏にかかる負担が軽くなります。水禽なども、夏は暑く冬は冷たいコンクリートの上に長時間じっと立っているのは、足裏を傷める原因になりかねないでしょう。植物に覆われた地表には真夏の照り返しのきびしさをやわらげ、雨のあとのぬかるみを防ぐなど、環境

衛生上の利点があるのです。

日本の動物園でスライドを撮ってアメリカの飼育係に見せると、展示面積の広さ、狭さなどよりも「なぜオオカミをコンクリートの床の上で飼うのか」という声が聞かれることがあります。もっと緑を!これはアメリカに住む人々だけの意見ではありません。今年の1月に私は日本のある動物園長からお便りをいただきました。秋にニュージーランド旅行をされたそうで、オークランドの動物園をすみずみまで4時間見学された彼の感想を引用してみましよう。「緑の活用、利用法について日本はまだまだだと痛感、緑の育成は吾々動物園人に課せられた大きなテーマだと思知らされた次第です」

お伽話と現実

動物園は世間の人々にとって遊びにゆくところであり、余暇活動の対象です。そのせいか、動物園の話をして真剣に受け取らない人がいます。10年近く前はカンガルーを捕らえようとして尻尾を両手でつかまえました。(またもやカンガルーの話になってしまいました)運悪く、逃れようとしたカンガルーにふりまわされ、右肩を傷めて何か月も療養(かなり痛い経験でした)を受けたものの、専門医に100パーセント回復の見込みはないと申しわたされました。その時の話ですが最初に医者のところに行くと、看護婦が出てきてどう



広い芝生の上で飼われているボンテボック(アフリカ産レイヨウ)。ネブラスカ州オマハ動物園

しました、と聞きます。カンガルーが原因だったから彼女はケタケタ笑い出し、止まりません。こっちは右肩と右腕がいうことをきかずに苦しんでいるというのに、です。

またある会議の席上で、ボブというビジネスマンにこの話をしたらゲラゲラ笑い始めてなかなか止まらず、真面目に耳をかたむけようとしません。私のいうことを信じていないのは明らかです。素人に動物や動物園の話をする時には気をつけねば、と知らされたことでした。

人々にとって「動物」とは身近に見られるイヌ・ネコなどのペットを指しています。農業家畜であるウシやウマが市民の視界から消え去って久しく、ペットが「動物」を代表する役割は一層強化されています。そしてペットは家族の一員、つまり「抱きしめて可愛がる」ためのものです。また人々にとって、山野に住む野生動物はペットの延長線

上にあり、やはり「可愛がる」対象のようです。その辺りから、一般市民と動物の専門家の間に考え方の隔たりが目立ってきます。

ペットは野生の状態からは何千世代も隔離され、人間の庇護の下で人間の要求に合致するよう造り変えられています。それに比べて野生動物は、何万いやそれ以上の世代にわたる進化の過程を、苛酷な自然条件の中で生き延びてきた強者なのです。この両者を同一線上に置いて混同すること自体、大変な間違いといえるでしょう。

世間一般の「動物」に関する認識は、「きれい、かわいい、かわいそう」の3Kの次元に留まっている、といった日本人がいます。言葉は違っても、アメリカでも事情は似たようなものでしょう。野生動物を単なる3Kの対象にまでおとしめるのは、冒瀆がいい過ぎなら、卑下以外の何物でもありません。そしてこれも、都会生活の産物の一つなのかも知れません。

市民の野生動物に関する知識や態度は、もっぱらテレビの番組によって培われるようです。だがどんなに考慮して制作されても、テレビ番組は原材料である動物を滅菌消毒し、消費者の口に合うように料理されたイメージに過ぎないことが多いのです。第一、テレビのスクリーンからは匂いも、実際の大きさも伝わってきません。それはもう動物というよりも、お伽話の登場人物ではないのでしょうか。

テレビ番組の野生動物から「離乳」できない人々が、肥大したお伽話の概念を抱えて国立公園にやってきました。たまたまクマなどを見ると、ホンモノの動物とぬいぐるみ人形の区別がつかず、「かわいい!」と近寄り、食べ物を手渡そうとする人がいるそうです。現実の相手は大きな捕食獣です。だからひっかかれたり噛み付かれたりして大怪我(大いに怪しい我と書きます。クマではなくヒトの方です)をするのも当たり前でしょう。

こう見てくると、看護婦サンやビジネスマンのボブが私のことを笑ったのも無理はないと思われまます。野生動物を3Kの舞台に格下げした彼等には、「かわいい」カンガルーのあの筋肉質の力強さなど想像もつかないことでしょう。

動物についての正確な理解を市民に伝えるのは、無理なことかも知れません。しかし現実に即した



スマートトラの展示には芝生や築山が使われている。デトロイト・ベル島動物園

知識を抜きにしては、真の動物愛護や保護は成立ちがたいのです。

南アフリカとジンバブウェを訪ねて

§はじめに

昨年の暮、私達は南アフリカとジンバブウェを訪問しました。主な目的は遺跡にある岩壁画の見学だったのですが、それらの岩壁画が、どちらの国でも国立公園の中にあつたので、沢山の野生動物を見ることも出来ました。観光で訪れるアフリカと言えばどうしてもケニアやタンザニアといった東アフリカが中心で、南アフリカやジンバブウェを訪ねた方は少ないと思います。そこであちらで見られた野生動物や、触れる事が出来た自然や文化について少しお話ししようと思います。

§ ナタール国立公園

まずシंगाポール経由で南アフリカのヨハネスブルグに着きました。ここから国内線に乗り継ぎ、ナタール国立公園の玄関口であるピーターマリツブルグに到着しました。飛行機から見る南アフリカ北東部の大地は延々とつながる熱帯雨林や広々と広がるサヴァナをイメージするアフリカとは全く違い、植林や牧草地と思われる緑と赤茶けたアンツーカーばかりで、隅々まで人の手が入っている様子です。体の半分にしか縞の無いシマウマ“クアッカ”や美しい青灰色の体を誇ったカモシカ“ブルーバック”が1800年頃に滅んでしまったのも無理は無いという印象を受けました。

ピーターマリツブルグのオリビ空港（何ともアフリカらしい名前ですね）には岩壁画への案内をかってでてくれたナタール国立公園でゲームレンジャーをしているフィリップ・ブラウン氏夫妻が私を迎えてくれました。まずご夫妻の家に行き、昼食をいただきながら向こう3日間の計画を話し合いました。目的地のンデマ峡谷までは車で5、6時間もかかります。毎日往復するわけには行きませんから、夫妻の友人がゲームレンジャーの責任者をしていて、宿泊施設もあるウィーネン保護区をベースにして峡谷まで行くことになりました。

ブラウンさんの主な仕事は遺跡に残った岩壁画の保存と記録です。自宅の離れにも仕事場を作り、模写の仕事などもやつておられました。仕事の一部を見せていただいたのですが、その離れには警報装置が付けてある上に四重の鍵まで付けています。どうもかなり治安が悪いようです。居間のソファの下から毒ヘビ“アダー”の実物そっくりの模型が顔を覗かせていました。実はこれは飾りではなく泥棒避けなのだそうです。現に3日後に

家に戻って来た時、警報装置の線が切れ家の中へ侵入しようとした跡を発見しました。どうやら模型の効果があつたようです。

離れを出て、母屋へ戻ろうとした時、中型の鳥が庭に舞い降りて来ました。ワッ！と思いました。なんとハダグトキだったのです。ハダグトキがこの地方に分布している事は知っていましたが、まさかトキが人家の庭にまで来るとは予想も



庭に飛来したハダグトキ

していなかったので、とても驚いてしまいました。しかし、その後、ハダグトキは至る所で見ることが出来ました。

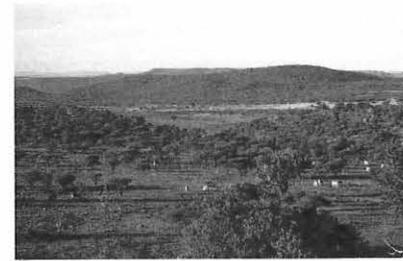
ウィーネン保護区に向け出発です。南アフリカは雨期が始まったばかりでした。しかし、去年は異常に雨が少なく、普段ならこの時期のダムの貯水量は60%程度だそうですが、私が到着した前日で95%、当日も山間部は大雨で貯水量は既に99%になっていました。この事は日本でも報道されたそうですが、機上にいた私は全く知りませんでした。目的地のンデマ峡谷では鉄砲水で3人が流され、内一人が行方不明になっていました。目指す岩壁画に到着出来るかどうか現時点では分からない、と言うブラウンさんのコメントに私はとてもがっかりしました。

道中、あちこちに牧場があり、アフリカらしくないホルスタインやヘレフォードが飼われていました。その中にプレスボックが混じっていました。日本の動物園ではわずかに2頭しか飼われていない希少なカモシカです。これは牧場の所有者が自分の趣味として、またハンティング用に飼っているのだそうです。また、植林地の多い中に所々自然林らしきものも残っています。しかし、これも自然保護のためではなくハンティング用に残されたものなのだそうです。

ブラウンさんの運転する四輪駆動車は地元の人が脇を歩いている地道を時速120kmでぶっ飛ばします。ちょっと無茶な気もしますが、制限速度が120kmですから合法なのです。この国でもやはり

警察がネズミ捕りをするそうです。摘発される人はどんなスピードを出しているのでしょうか。

ウィーネン自然保護区に到着。広さは7000haも



ウィーネン自然保護区

あります。大変な広さですが、この面積を70kmに及ぶフェンスですっぽり囲っているそうです。こうしておかないと保護区から出た動物が殺されてしまうからです。しかし、保護区の入口で延々とつながるフェンスを見てしまった私はどうしても動物が飼われているというイメージが拭えません。もちろんエサなどやるわけではなく、保護区の中にはヒョウ、ハイエナ、ジャッカルといった肉食獣もいて、動物達は7000haという広大な面積の中で本来のアフリカの野生の営みを行っているのですが、どうもアフリカの野生を見ているという印象が持てません。ダチョウの群、エランドの群、シロサイの母子、大きなアミメキリンの雄、グレートクーズーやハーテビースト、インバラにナタールタイガー、それにリードバック、ウォーターバック等、様々な動物が見られたのですが、いつまでたってもアフリカの野生に触れたという感動が持てませんでした。

しかし、翌々日、空港へ行く道すがら、草原でエサを探すシュバシコウを見た時は、興奮しました。冬のヨーロッパからここまで渡って来ているのです。これこそ野生だ、とアフリカに来て初めてアフリカの自然に触れた気がしました。近付いて写真を撮ろうとしたのですが、野生のシュバシコウは私の接近を200mまでしか許してくれず、大空高く羽ばたいて行きました。

§ マトボス国立公園

南アフリカで3日間を過ごし、次いでジンバブウェに向かいました。途中、ダーバンの空港で滑走路の脇にカカシが置かれているのを見つけました。犬のシルエットをかたどった板も立ててありました。これはどうやら鳥避けのようです。日本の空港でも鳥は厄介者で、その対策に皆さん頭を悩ませていらっしゃるようですが、ここでも同様なのでし



マトボス

驚きました。まさかアフリカの鳥が

ウサギを怖がる、とも思えないのですが。案の定、ハダグトキやアフリカクロトキがここここでエサを探していました。

ジンバブウェでの目的地はジンバブウェの第二の都市であるブラワヨから南へ60km程のところにあるマトボス国立公園です。マトボスとは現地のショナ語で岩山を意味します。その名の通りここは岩山の国立公園です。しかも、その岩は30億年前からのものだそうです。東アフリカにはサヴァナの中にカピーと呼ばれる岩山が散在し、一つの生態系を形成しています。しかし、ここマトボスの岩山はそんな規模ではありません。オーストラリアにエアーズロックという世界最大の一枚岩がありますが、この岩山は一枚岩ではないものの、延々と続く岩また岩の風景はエアーズロックに優るとも劣らないものではないでしょうか。岩壁画は麓から2時間程歩いた所にあります。その行程の総てが岩山の上。岩山は更に奥まで続いています。

所々岩清水が流れ出しています。見るからにおいしそうだったので、アフリカで生水は厳禁、と言われてはいたものの、こんな山の中なら大丈夫だろう、と飲んでみました。やはり冷たく、うま、岩歩きでカラカラに渴いた喉を潤してくれました。それに体調にも何の影響もありませんでした。

岩山ではチャクマヒヒの群が見られました。見慣れない人間を見て盛んに警戒音を発していました。鳥ではホウオウジャクの仲間がよく見られ、繁殖期が始まっているのでしょうか、長い尾が印象的でした。また上空をコシジロイヌワシが舞っているのを見ました。しかし、クリップスプリングの溜池は見られたものの姿は見せてくれませんでした。残念に思っていましたら、替わりにゾウハナジネズミが姿を見せてくれました。

平野部の方ではセーブルアンテロープの群やイボイノシシ、グレートクーズー、インバラが見られましたし、サバンナモンキーも姿を見せてくれました。その上ミナミジサイチョウも見ることが出来ました。



ミナミジサイチョウ

ほんの一週間程の短い滞在の割には様々な哺乳類や鳥類に出会え、大変満足出来ました。しかし、やはりフェンスで囲まなければ維持出来ないアフリカの野生に対し、なにかモヤモヤするものが残った事も否めません。

(飼育課 主査：長瀬健二郎)

グラフZOO

1年を迎えたアイファア

緑も大きくなりました。



は虫類生態館のこの1年

日本の自然をイメージした入口付近の植物もしっかり根付き、ヒヨドリやメジロなどの野鳥も訪れています。新緑の春になれば若葉がいっぱいになるでしょう。(撮影：2月下旬)

昨年3月23日に開館した「は虫類生態館」はオープン後早くも1年を迎えました。

飼育経験のないカエルやサンショウウオなどの両生類、熱帯魚や海水魚、はてはタガメなどの水棲昆虫まで展示するため、どたばたの連続でした。そんなこの1年を写真で振り返ってみました。

(撮影：榎原安昭、西村慶太、中上正幸)

新登場の動物たち

いざオープンしてみると目立たないため、選手交代した動物もいくつかありました。(写真は夜行性のトッケイヤモリに交代して登板した昼行性のマダガスカルミドリヤモリ)。



満員御礼



開館間もない昨年5月のゴールデンウィークには多数の入園者が訪れ、入館制限をしたため入口前には長蛇の列ができました。

楽しい手づくりの看板

職員の手作りの説明板やインフォメーションコーナー(ゲンゴロウギャラリー)もできました。楽しい説明やニュースをお楽しみください。



赤ちゃん誕生



タガメ

5月には数百匹の赤ちゃんがふ化し、一部は生きた教材として大阪府下の小学校などにお分けしました。



アオハリトカゲ

5月には日本の動物園では初めての赤ちゃんが生まれました。このトカゲは卵胎生で、卵ではなく赤ちゃんを生みます。

ワレンヨロイトカゲ

12月には、これも日本の動物園では初めての赤ちゃんが卵胎生で生まれました。



キーパーズ アイ

ペンギンがツルッ

冬の寒い日。凍った地面でペンギンがツルッとこけそうになりました。これを見ていたお客さんがクスクス笑っています。何とものんびりした風景に見えるでしょう。でも、飼育係にとって、こんな日は要注意なのです。ペンギン舎はコンクリートの山と池の部分に分かれています。地面は白いペンキで塗装していますから、よく見ないと氷が張っているのがわかりません。気をつけていないとツルッとすべって尻もち…だけならまだしも池に落ちないとも限りません。

もしツルッとなったら、こういう時の飼育係の心境というのは、“痛い”とか“危ない”とかいうより“カッコ悪い”の一言につきます。だから、もし皆さんが動物園でたまたま飼育係が仕事にころんだりするのを見てしまったら、すぐにその場から離れるようにしてくださいね。

と、こんな事を考えながら仕事をしている場合じゃないの、と思ってたら、また同じ所でペンギンがツルッとなりました。お客さんは笑っています。でも、僕は笑ってる余裕はないのであります…。



スリに御用心

いつものように動物舎をそうじし、エサを与えた後、観客側から動物舎の様子をチェックします。夜行性動物舎で、毎日している僕の日課です。動物の観察やそうじがちゃんとできているか、ガラスは汚れていないかとボンヤリと、いや真剣に見てまいります。

と、タヌキ達の様子がいつもと違う、いつもは食事を終え(タヌキは、食べるのがすごく早いのです)のんびりしているはずなのに、皆でウロウロしています。“なんじゃ”と思いきよく見ると2頭が何か物を引っ張りあって遊んでいるし、他の2頭は地面に鼻をこすりつけています。さらによく見るとそれは100円玉ではありませんか。“誰や、お金なんか入れたんわ!”と一瞬思いましたが、ここはガラス張りの動物舎で外から物は投げ込め



るはずもなく、???とあって、やっと気づきました。ズボンの後ろポケットに手を入れると、サイフがありません。あーあ。すぐに回収しましたが、手元に集まったのは硬貨320円のみ、あとは細かい紙くずに。(造幣局の方ゴメンナサイ。)

夜行性動物舎は、昼夜を逆転させて展示していますから、展示場は暗くなっています。入口に“スリ等に注意してください。”と書いているのですが、まさか自分が、タヌキにスラれるなんて、トホホ…。

(飼育課：早川 篤)

2月3日 関西国際

空港でワシントン条約違反で発見されたエボシカメレオン50頭とヤドクガエル60頭を緊急保護しました。



2/5. 繁殖期に合わせて、ソデグロツルの屋間の同居を再開しました。

2/6. ユリカモメ、セキセイインコ、カモメを各1羽保護しました。

2/7. ワシミズク2羽とイヌワシ2羽の採血を行いました。これらの鳥類は、外見で性別判定ができないため、血液中のDNAで性別判定を行います。

2/8. 昨年生まれたドリルのオス“ドリー”の身体測定を行いました。これは毎月行っているもので、頭胴長と尾長、体重を測定しました。

2/10. チンパンジーの“ミナミ”が風邪ひいたので、展示を中止して治療を始めました。

2/12. キジバトを1羽保護しました。

2/13. オスのヒツジが1頭生まれました。

先月と今月保護していたキジバトとドバトが元気になったので、放鳥しました。

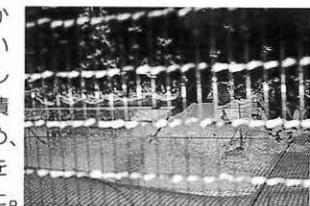
2/15. 1昨年ふ化したアカコンゴウインコ2羽をアドベンチャーワールドに贈りました。

2月16日 昨年12月にふ化したフンボルトペンギンのヒナが74日齢で巣立ちして初泳ぎしました。



この他5羽が順調に生育しており、今後順に巣立ちするため、このヒナに個体識別用の翼帯を付けました。

2月17日 昨夜から降り続いた雪がツルッ舎の網に積もったため、雪おろしを行いました。



2/18. アオバトを1羽保護しました。

2月20日 ツキノワグマが脱出したとの想定で、猛獣脱出捕獲訓練を行いました。

若手飼育係員が入ったヌイグルミを追込みなが



今月もおもしろ情報満載

ZOO DIARY



ら、麻酔銃(空砲)を発射、脱出から約30分後に訓練は終了しました。

2/21. 風邪で展示を中止していたチンパンジーの“ミナミ”の症状がよくなったので、展示を再開しました。

2/23. 昨年12月にふ化したフンボルトペンギンのヒナ2羽に個体識別のための翼帯を付けました。

2/24. キジバトを1羽保護しました。

2/25. 昨年“鳥の楽園”で人工ふ化したアカハシリウキウガモのヒナ2羽に個体識別のための翼帯と足環を付けました。

2月28日 タンチョウ2ペア4羽をシンガポール動物園に贈りました。



これは、昨年贈られてきたマレーグマのペアの返礼となるものです。贈ったタンチョウのうち2羽は当園生まれで、残りの2羽のうち1羽は東京都立大島公園、もう1羽はあやめ池遊園地動物園で生まれたものです。

エミユウが今季最初の卵を産みました。

2/29. トカラヤギが1頭生まれました。

サル舎のドリルとバタスザルの出産準備のため屋外展示場のガラス面を板で遮へいしました。

■お知らせ■

●「春の動物と花のフェスティバル'96」
4月21日(日)～5月6日(月)

●動物園のおじさんのお話
「動物クラフト作り」

日時：4月21日(日) 午後1時～

場所：レクチャールーム

「はてな大集合」

日時：5月5日(日) 午後1時～

場所：レクチャールーム

愛ある暮らし、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？動物園での世話の仕方は？仲間はず？など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしかいかたシリーズ<既刊本>

B5変型判・オールカラー

むし くらしかいかた

野山でみかける身近な昆虫たち
250種を紹介。

ちいさないきもの くらしかいかた

昆虫以外の小さな生き物を320
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。  ひかりのくに株式会社 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

新・きれいな色 FUJICOLOR SUPER G ACE 400

新・きれいな色



カラの大林

桜橋本店 ☎341-8091
阪急三番街店 ☎372-5031

動物の生態を描く唯一の文学雑誌

動物文学

昭和九年平岩米吉によって創刊

本誌は生態研究を基礎として動物文献を収集整理するとともに、シートン、ザルテン、バイコフ等の諸作家を紹介した本邦動物文学の母胎です。

<研究・考証・記録・随筆・翻訳等を掲載>

会費/年1,500円(切手72円・呈既刊号目次)

動物文学会

〒152 東京都目黒区自由が丘3-12-2 電話03(3717)1659・振替・東京5-9800

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分(10本常備)

- 対象/保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し郵送料510円は必要)
- 申込先/当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)
好評発売中 ¥800(50度用)

天王寺動物園の本

入園の記念・手引に……



オールカラー

500円 園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会 〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

マスタのポップコーン



<営業品目> 製造機械・保温機 他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

(株)増田食品 〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30
TEL (06)865-0165





雪印 つぶよみ フルーツ ヨーグルト



●ライチミックス ●ストロベリー ●アップル ●ピーチ ●フルーツミックス

おいしさは、産地のよさです。

台湾のライチ、フィリピンのナタ・デ・ココとパイナップル—— ●ライチミックス
 国産の女峰、オレゴンのトーテム、中南米のチャンドラー、季節の旬を追って—— ●ストロベリー
 日本の富士、中国・韓国の国光。それぞれおいしい季節の—— ●アップル
 桃といえば中国です。そして韓国。旬に一括収穫した白桃で—— ●ピーチ
 アプリコット、メロン、アップル、パイナップル、ミカン。果物狂の—— ●フルーツミックス

お待たせ
新発売

希望小売価格・税抜 **各100円**



◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種のりものがあります。

久竹娛樂株式会社
TEL (06)541-3938(代)

一日
愉快地
たのしめる



なきごえ

1996年4月10日発行 (毎月10日発行) 第32巻 第4号 (通巻368号)

編集 / 大阪市天王寺動物園事務所

発行人 / 大阪市天王寺動物園協会 伊東重朗

印刷所 / 株式会社 松村善進堂 定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶白山町6-74

電話 大阪 (06) 771-0201

振替口座 00930-2-37823

編集委員

樽本 勲 / 馬詰好文 / 増野悦敏 / 中川哲男 / 吉本昌俊 / 長谷川敏昭 / 落合正彦 / 宮下 実 / 長瀬健二郎 / 榊原安昭 / 森本委利
 高橋雅之 / 中上正幸 / 堀内智生 / 小林崇宏 / 竹田正人 / 大野尊信 / 野口秀高 / 早川 篤 / 土谷正道 / 村上勇一 / 仁田原洋